

学生の意識と行動に対する持続可能な開発のための教育(ESD)の影響に関する研究

—京都大学を事例として—

杵本友里

キーワード：ESD、高等教育、サステナビリティに関する意識と行動、授業評価

1. 研究の背景と目的

多くの高等教育機関と同様に、京都大学においても、キャンパスそのもののあり方、カリキュラムの構成、大学としての方針などについて持続可能性（サステナビリティ）の観点から様々な取組がなされている。その取組には、持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development, ESD）を実施するアプローチの一環として、サステナビリティを焦点とした科目の提供も含まれる。

サステナビリティに関連したカリキュラムの評価が、ESDの質を向上するために不可欠であるという視点から、本研究においては、京都大学における様々なESDの取組みのうち、学部における正規教育に着目し、評価を試みる。本研究の目的は、1) サステナビリティ関連科目の学生の意識と行動に対する影響を把握し、2) 学生がより持続可能なライフスタイルへとつながる行動を選択することができる教育のあり方を考察することである。

2. 研究方法

京都大学において学部学生を対象に開講されているサステナビリティ関連科目のうち、5つの科目において、全講義開始前と全講義終了後にアンケート調査を実施した。この調査の目的は、学生のサステナビリティに対する意識、知識、行動が当該科目の受講の前後でどのように変化するかを明らかにすることである。調査実施対象とした5つの科目は、講義全体の構想、テーマと各回の授業内容のつながり、学生間の対話の量など、様々な要素において異なる特徴を呈している。

アンケート結果については、それぞれの科目が学生のサステナビリティに関する意識(知識と姿勢)と行動(日々の実践とサステナビリティに関する問題を周囲に訴えかける意欲)に及ぼす影響を科目ごとに分析した。また5つの科目ごとの結果について、相互比較も行った。

3. 主な研究成果及び考察

5つの講義において、延べ68名の学生が講義開始前と講義終了後両方のアンケートを回答した。

アンケート結果から、これらの科目を受講することによって、学生のサステナビリティについての知識は拡大されることが明らかになった。特に重要な点として、講義開始前は大半の学生がサステナビリティについて環境に関する側面に限定された見方を示していたのに対し、講義終了後には環境的側面だけでなく社会的、経済的、そしてその他の側面をも包括する見方へと変化したことが挙げられる。

5つのうち3つの科目において、サステナビリティに関する意識が向上したこともまた明らかとなった。しかしながら、行動については5つのうち、2つの科目でしか前向きな変化が見られなかった。変化が見られた2つの科目はいずれも、対話を重視した授業展開で、受講した学生は、担当教員との対話よりもさらに他の学生との対話に影響を受けていることが分かった。

4. 結論

本研究の結果から、学生にとっての直接的な経験を重視した科目が、意識や行動に関するESDの目標を達成するのに効果的であることが示唆された。その一方、サステナビリティに関して自ら訴える力の向上はあまり見られなかった。京都大学におけるESDの成果をより高めるために、学生中心の学習方法を導入すること、そして担当教員らが教授方法についての経験や資源を共有し合うための場を形成することが推奨される。